

学生せっけん新聞

第1号 2009年10月24日発行
編集責任
宮澤温志・山本成剛・谷尻倫子

「せっけん運動」って何！??

1976年ごろ、琵琶湖の水質悪化が深刻化する中で、家庭から出る生活雑排水の問題を重視した消費者が中心になり、合成洗剤に替えて「せっけん」を使おうという運動が滋賀で始まった。この動きは、翌1977年に琵琶湖に大規模赤潮が発生したことをきっかけに、大勢の県民や各種団体を巻き込んだ「せっけん運動」へと拡大した。この活動は一時使用率が7割を超えるまで普及し、琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例（びわこ条例）制定の原動力になる。



そして「せっけん運動」と並行するように、1978年に「家庭から出る廃食油を回収して、せっけんへリサイクルする運動」が始まり、せっけん運動と連動して県下に広がっていった。この活動は、30年たった今でも続いている。

「碧いびわ湖」って何！??



私達がインターンシップでお世話になっている[碧いびわ湖]。そもそも碧いびわ湖って何だ？と思われるでしょう。簡単に経緯、概要を説明しておこう。

特定非営利活動法人碧いびわ湖は、前身である滋賀県環境生活協同組合（環境生協）から全事業を引き継ぎ、今年の7月31日に誕生したNPO団体である。事業内容は生協の基本である共同購入はもちろん、廃油や牛乳パックの回収、対企業としてはグリーン購入も行っている。共同購入も、牛乳パックを再生したトイレトペーパーである「ただいまロール」、同じくティッシュペーパーの「おかえりティッシュ」や、瀬田のマルダイ石鹸工場で廃油から再生される粉せっけん「びわ湖」など、環境を意識したものが多い。環境生協から事業を引き継いだ碧いびわ湖の代表理事は村上悟さん（32歳）。常務理事である根木山恒平さんも同じく32歳。見事、環境生協は若い世代にバトンタッチされたのだ。今後も何世代にわたってもきれいな、元気な琵琶湖を守るために、碧いびわ湖はさらに積極的に活動を広げていくだろう。（山本成剛）

碧いびわ湖にさらに興味を持ってくださった方は今すぐ、ネットで「碧いびわ湖」と検索するべし！普段の活動が見えてきますよ。

「大学生は見た♪」で
私たちがブログに
参加しています☆

碧いびわ湖のブログ更新中♪ ⇒ <http://aoibiwako.shiga-saku.net/d2009-09.html>

せっけん利用者の声



小西 恵美子さん



小西さんは、約20年前に婦人会の役員をしていた際に、粉せっけんや琵琶湖を守る活動に熱心な方と出会い、粉せっけんを使用し始め、以後10数年間もの間粉せっけんを使用している。

使い心地について、「悪いものが入っていないから、仕上がりは白くはならないけど、ふんわりします」とおっしゃっていた。

また、30年間続いているせっけん活動について、「今せっけんを使っていない人々にせっけんはいいのだよ、ということを伝えたい」とおっしゃっていた。小西さんは、ニコニコ元気にお話ししてくださり、せっけん活動について伝えてゆきたいという気持ちを再発掘することができた。(谷尻倫子)



寺井 美耶さん



寺井さんは、30年ほど前にせっけん活動が始まった際に、職場で洗剤委員会に所属しておられ、以後ずっと粉せっけんと液体せっけんを使用していられる。

液体せっけんを洗面所やお風呂洗い、外の穴掃除に活用しておられ、「一本でいろんな使い方ができるので便利ですよ」「とてもきれいになるのですよ」とおっしゃっていた。また、今後のせっけん活動について、国の政策をきちんと行うべきだと思います」とおっしゃっていた。

やさしい笑顔の寺井さんは、環境以外にも、食材などにも気を使っていられるようで、一緒に取材に行った伊藤さんと主婦の鑑だなと感心していた。(谷尻倫子)

マルダイ石鹸工場

—廃油からせっけんへ、人と人をつなぐマルダイ石鹸—

大津市瀬田にある(株)マルダイ石鹸は、創業(1975年)以来、回収された家庭廃食油を原料に粉せっけんを製造、販売している。工場では、直径・深さ2mの釜を用いた高温焚込法によって粉せっけんが作られており、そこはまるで炭づくり(炭焼き)の作業場のような「ものづくり」の現場である。家庭廃食油には、いろいろな種類の油がふくまれているため、これをせっけんにするには熟練した技術が必要だ。社長の中井さんは、石けんをつくりつづけて30年。「人と人のご縁」を大切に思う中井さんによって作られたせっけんは、その多くを“顔の見える消費者”へと販売されている。(伊藤真紀)



廃食油回収

廃食油回収に
長年携わっていらっしゃる
エキスパートに
お話を伺ってきました♪



田中 広次さん



田中さんは、廃食油回収に携わっていらっしゃる、元気でとても優しい男性です。職場の同僚の方の影響で廃食油回収を開始され、以後、せっけん活動が始まってから64歳の今に至るまでずっと廃食油回収に従事しておられる。

現在、廃食油回収の他にも、自治会の役員やパートなど多忙な生活を送っていらっしゃるにも関わらず、「環境のことを考え」、「体を動かして、澁刺としていたい」ということで、この活動を続けていらっしゃる。また、田中さんは、廃食油回収の際に、近隣住民の方と楽しそうにお話をされるなど、「人とのつながり」を大切になさっている。田中さんの、志を忘れず継続して物事に打ち込んでいらっしゃるところや、人とのつながりを大切にしていられところなど、私達も見習わなくてはならないな、と思った。(谷尻倫子)



鳥巢 嘉晴さん



「目に見えて琵琶湖や家の横にある小川が綺麗になっていった。」と廃油回収のやりがいを語ってくれた、鳥巢嘉晴さん 72 歳。30 年間続けられた秘訣は、「ご苦労様」という住民の言葉と、廃油回収のみにうちこまず多くの趣味などをもち毎日を過ごしていたことと話してくれた。事実、回収活動も二年前に引退した今は畑やグランドゴルフなどの趣味をもち充実した毎日をすごしている。

今は油の回収量もせっけんの使用率も当時に比べたら低くなってはいるが、それでもなお運動をし続けてくれる方がいるのは素晴らしいことだと、鳥巢さんの笑顔をみて改めて感じた。(宮澤温志)



増村 和美さん



野洲市で廃油回収をされている増村和美さんに活動の経緯を伺った。増村さんは昔、他の地域に住んでいたが、偶然野洲に引っ越してきた際、現在お住まいの地域の婦人会活動が盛んだった。そうして地域活動に参加していくうちに、生協活動にも参加し、気がつけば碧いびわ湖の前身である環境生協の従事者となっていた。

1995 年からは「エコロジーマーケット野洲」というグループを立ち上げ、当初 10 数人で活動を始めた。年に 1 回、地域で開催されるフリーマーケットに参加し、自分達のブースで廃油回収を実施したり、せっけんへの加工を実際にデモンストレーションしたりした。その後もグループで月に 1 回、市役所で油回収をしたり、2 ヶ月に 1 回は地域をトラックで廃油回収に回っている。こうした市民活動が今後も続いていくことを期待している。(山本成剛)

「BDF」って何!??



廃食油は石けん以外に活用できないのか。いや、廃油にはもう少し可能性がある。それこそが BDF [バイオディーゼル燃料] である。この BDF は単なるリサイクルでなく、普通の軽油と比較していくつかのメリットがある。

第一に、二酸化炭素発生量が軽油の約 $1/4$ で済むこと。これは地球温暖化が叫ばれる時代において非常に大きなメリットであろう。第二に、排ガスの黒煙が軽油の $1/3$ に抑えられること。よくトラックやバスの排気ガスが非常に黒いことがある。しかし、BDF ならこれも軽度抑えられる。第三に、酸性雨の原因となる硫黄酸化物が、軽油の $1/100$ 以下である。温暖化と同時に、排気ガスは酸性雨を引き起こす原因ともなるが、主たる原因の物質が非常に少なく、これもまた環境に優しい。最後に、喘息などの原因となる粒子状物質 (PM) が軽油に比べ、少ないということ。この点に関しては人体にも優しいのである。

そんな BDF、いったいどこで使われるのか。まず軽油を使用する農耕機械などである。廃油から精製した燃料で農作物を育てる。なかなか良い循環だ。

次に地域のコミュニティーバス。東近江市で運行されている[ちよこつとバス]の燃料には BDF が使用されている。排気ガスを多く排出しがちなバス会社。それだけに環境意識も高い。

このように廃食油は地域で回収され、地域で BDF に生まれ変わり、地域で活用される。これから更に BDF が普及していくことを強く期待している。(山本成剛)

編集者のひとこと (・▽・) ♪



立命館大学で行われている、ボランティアコーディネーター養成プログラムという講義の受講者である私たち3人(写真左から宮澤温志、山本成剛、谷尻倫子)は、今回碧いびわ湖にインターンシップ生として勉強させていただきました。今回のテーマは「せっけん運動の見える化」。当時の活動を知らない若い世代の方に少しでも運動について知っていただければと思い、このような新聞という形でまとめさせていただきました。多くの方にお読み頂けたら幸いです。

また取材に協力してくださった皆様、碧いびわ湖の皆様、滋賀県立大学の伊藤さん、皆様のおかげで完成させることができました。ありがとうございました。